古文献にあらわれた台湾先史時代※

国　分　直　一

On the Prehistoric Formosa seen through the Old Documents※

By

Naoichi KOKUBU

It is needless to say that numerous elements of Lungshanoid culture from Formosa are well known. However, considerable interest has been recently aroused by the occurreance in the Ryukyus of objects, usually associated with ancient China. So, from the archaeological point of view, the author believes in the relation between the Wu-yueh area and southern islands including Formosa and the Ryukyus in the prehistoric age.

With regard to southern islands in the East Sea, in addtion to the archaeological materials, we shall be able to make use of old Chinese documents with them. Accompanied with an analysis of old Chinese documents, the present author wants to deal with prehistoric Formosa.

There is, however, a serious question for coinciding geographical designations. The geographical recording of the Former Han Dynasty refers to the people called Tung-ti, living far off the coast of Hui-chi province, south of the Yang-tse River. The Tung-ti Island is supposed to be Ryukyu or Taiwan, as Dr. S. ICHIMARU suggests. In the following Three Kingdom Age, we find the names of I (夷) Island and Tan (亶) Island, to the former the Kingdom of Wu sent the expeditionary forces and captured thousands of natives there, being unable to reach the latter. Dr. K. SHIRATORI remarks that the Tungti Island ("Tun" means the "east") corresponds with the I Island, and the Tan Island with the Tane Island. Dr. R. KUWATA suggests that both "Tungti" and "I" were named after fictious island in the southern sea, and the name of the "I" Island was applied to Formosa, when the forces of the Wu Kingdom landed there.

I have an opinion that the fictious names of "Tungti" or "I", in those days from the Han Dynasty to Three Kingdom Age, meant southern islands of the East Sea including Formosa and the Ryukyus. However, generally speaking, I understand that Formosa might be the representative island for the "I" Islands, because For-

※ 水産講習所研究業績　第361号, 1962年1月18日 受理.
Contribution from the Shimonoseki College of Fisheries, No. 361.
Received Jan. 18, 1962.

mosa is the biggest island that lies near the East Wu area.

With regard to the Tan Island, Dr. K. SHIRATORI remarks that the Tan Island corresponds with the Tane Island. Viewing from the archaeological finds such as Taotie objects and Dragon pendants found from the Hirata site (Yayoi period) of the Tane Island, I believe that Dr. K. SHIRATORI's opinion is archaeologically backed up.

For three centuries, from the Three Kingdom Age to the Sui Dynasty, there was no allusion to Formosa or the Ryukyus in the Chinese recordings. In the Sui-shu, we find a more or less minute description on the Liu-chiu, which was invaded by the forces of the Sui Dynasty and they captured thousands of natives. Dr. S. ICHIMURA points cut a noteworthy coincidence between the description of this island and that of the I Island. There have been much debates as to whether this Liu-chiu was Formosa or Okinawa, or whether the informations about these islands are confused each other in the Chinese recordings of the Sui Dynasty.

The vocabulary of the native in the Sui-shu, deciphered by Dr. K. SHIRATORI, suggests an affinity with the Indonesian language. But Dr. T. KANAZEKI suggests that some geographical names in the Ryukyus may be related to some Indonesian geographical names, because there is a common word construction among them. He also suggests that it is not credible that there was a replacement of race, but there might be only a replacement of language in such a case.

From archaeological and ethnological views including the linguistic point as suggested by Dr. T. KANAZEKI, the author thinks that some confused informations on these islands, Formosa and the Ryukyus, were conferred in the recordings of the Sui Dynasty. However, with regard to the stone plough described in the Sui-shu, the author believes that the compiler of the Sui-shu described the stone plough used by prehistoric Formosans, because a lot of stone ploughs are found from the prehistoric sites of Formosa.

Chao Ju-kua, a geographer and superintendent for the merchant shipping in Fuchien province, wrote : "In Liu-chiu, there are no particular products, and the natives have a liking for piracy, and so few merchants go there". In his famous Chu-fan-chih, we find for the first time the name of Peng-hu, the island lying between Formosa and Continent.

With regard to Bisaya, Dr. R. KUWATA and Mr. INO believe that Chao-ju-kua referred to the Visayan of the Philippines. The present author is, however, inclined to believe that Chao-ju-kua meant some south western Formosa in the name of Bisaya. If my opinion is permitted, the Chi-fan-chi seems to be a very important document which referred to the metal using of Formosan natives in the Sung Dynasty.

According to the "Discours ende cort verhael vant enlant Formosa" by CANDIDIUS, we can find out some vocabularies about iron and copper. So we can point out the existence of iron and copper in the Favolan tribe.

With regard to Tan-ma-yen seen in the Chi-fan-chih, Dr. T. KANAZEKI suggests the distribution of the geographical names which have similar pronouciation to Tan-

ma-yen in the areas including islands of Bashi channel and Formosa. He also points out that the Tan-ma-yen areas seem to have had special culture related with the fishing, hunting and land cultivation. In the "Fan-su-liu-kao" by Huan-shu-ching, we can refer to the description on pottery making of the aboriginals and some records about the emigration route of the Siryaya tribe.

一

古文献の上に，台湾先史時代の様相が何らかの形で登場しないものであろうか。この問題は台湾を扱う考古学研究者にとってもゆるがせに出来ない問題であろう。然しながら中国古文献に登場する中国東海の島又は国名は漠然としていて，その古名と現代の名称との比定が容易でない。従って，古文献の上に台湾先史時代を考えようとする場合に先ず解決しなくてはならぬ問題は島名の比定の問題である。

島名比定は中国東海には台湾，琉球から薩南の諸島にわたる一連の諸島が連鎖的に存在するために，比定が困難で屢々論争がまきおこされた。それらについて詳細に是非を論ずることは本稿の目的ではないが，亶洲とか琉球の国名（又は島名）をはっきりさせないままには新しい展開を試みることは困難である。従って，かって論争のまきおこされたことのある困難な国名比定の問題からはいって古文献に語られている台湾先史時代の様相を探る作業に及びたい。

二

会稽海外の東海における国についての最初の記載は前漢書に見られる「会稽海外有東鯷人分為二十余國以歳時来獻見」という記事であろう。市村讃次郎博士は，東鯷を今日の琉球か台湾をいうものではなかろうかとされた。[1] 白鳥庫吉博士は東鯷を台湾なりと説かれている。[2] 桑田六郎博士は二十余国に分かれ，歳時東獻という内容が果して台湾に適用し得るであろうかといわれ，東鯷は東夷洲と同じ意で本来架空の名であろう。或る特定の島の名として起ったのではなく，適当な島があればそれに結び付き得る名であると思うと注目すべき示唆を与えられた[3]。

然し近年，原田淑人博士は三国志の呉志の孫権伝や後漢書の東夷伝の記載から，夷洲，亶洲並に東鯷は会稽の海外に所在して一連の島嶼列をなしたと想像され，亶洲を種子島に，東鯷を琉球群島に比定されている[4]。

三国志（巻47）の呉志孫権伝に黄龍二年春正月将軍衛温，諸葛直を遣わし，甲士万人を以て海に浮び，夷洲および亶州を求めしめたとして，夷洲と亶洲が登場する。亶洲の長老の伝えるところでは秦の始皇が方士徐福を遣わして童男女数千人をひきつれて，海に入って蓬萊の仙山および仙薬を求めしめたが，徐福はそのままこの亶州に止まって還らず，その子孫相うけて今では数万家となったというのである。この仙山，仙薬を求める方士徐福の話は作られた伝説に過ぎないであろうが，「島民時に浙江の会稽に来て貿易をするものもあった」こと，また「会稽東冶県の人でかって渡航して亶洲に漂着したものもあった」とする記載は注目に価すると思う。但し亶洲は所在絶遠にして孫権の二将軍は至り得ず，ただ夷洲の島民数千人をつれ帰ったとされる。

白鳥庫吉博士は亶洲を種子島に比定され[5]，和田清博士又これに賛同されている[6]。亶洲については市村讃次郎博士の海南島説[7]，伊能嘉矩氏の同様の説があるが[8]，亶洲を種子島とすることには地名の音の上での相似のみでなく，尚若干の根拠があるのである。夷洲を広く，台湾，琉球を含む地域とすることは両者の相似の状況から見て無理ではなかったと思われるが，種子島はそれら広義の夷洲圏とは別に見られるだけの事情があった。この島は島が大きく豊かな農耕地に富むというばかりでなく，縄文式時代から弥生式時代にかけて，南九州における展開に近似した展開の様相をもちえたのである。即ち東海諸島中の文化地域を示し

ていたと見られる。会稽地方人の関心をひくことになりえたことにはそれだけの理由があったと見られる。殊に南種子は屢々東海の航海者の漂着する所であったことが，呉志孫権伝の記載の信憑性を強めると考えられるのである。然かも近年に至って，種子島広田の埋葬遺跡（弥生式時代中期から後期にかけての時期）出土の貝符に饕餮文に類する彫刻をもつものが見出され，また竜佩と見られるものがある。なお注目すべきものに「山」の字を彫刻した貝符が発見されている。その書体はいわゆる漢隷に属し，神田喜一郎博士によって後漢末位の書体であろうとされた。（神田喜一郎博士より金関丈夫博士への私信。[9]）

これらの考古学的な資料によって，種子島と中国東南沿岸地方との間になんらかの交渉のあったことが考えられるに至り，種子島亶洲説の考古学的な裏付が可能になったと見られるに至った。

原田淑人博士は種子島亶洲説をとられ，且つその立場から，広田の出土品のもつ意義に注目された[10]。金関丈夫博士も亦種子島亶洲説を支持され，広田の貝符をもって白鳥博士説の考古学的裏付であるとする立場を明にされている[11]。

既に東海の北端の亶洲が東呉に知られていたとするなら，東海中最も東呉に近く状況のやや詳細に判明していたと見られる台湾と亶洲の間に位置する今の琉球諸島の所在が知られていなかったはずはないと思われる。

但し台湾と今の琉球とが別個に取りあつかわれていたかどうかは問題である。

白鳥庫吉博士は東鯷を三国時代の夷洲に関連させて，後漢書東夷伝説序に「夷者柢也」とあるのは，夷は古書“*i*”の他に“*tei*”という発音があって，それが夷と同音であるまいかとされている[12]。とするなら東鯷は東夷洲の意となる。

後漢書は三国志より百余年も遅れた宋の范曄の作で，唐の章懐太子の註であるところから，前漢書や三国志に比して，やや具体的な記載になってもよいはずであるが，その後，隋書以降の記載が，明代がはじまるまで台湾と琉球を別個に扱っていないことから見て，後漢書の場合，夷洲即ち台湾，東鯷即ち琉球とする比定を行ないうるかどうかには疑問があると思うのである。

中国歴代の地理書の記載は古い記載を踏襲する癖があるので，後漢書の場合，前漢書の「会稽海外有東鯷人分二十餘國」とあるのをそのまま踏載し，その上で，夷洲，亶洲の記載を別にのせたのではなかろうか。台湾，琉球の内容がやや具体的に登場するに至る隋書の時代になるとあいまいな東鯷の登場しなくなることがその間の事情を語っているように思うのである。後漢書の夷洲も漠然と台湾および琉球を含んでいたとしても，呉の兵が上陸して数千人を捕虜にしたという上述の三国志の記載の夷洲は夷洲圏中の大島台湾であったと見るのが自然であろう。ついでに後漢書註引の夷洲記事をあげておきたい。

> 夷州在臨海東南去軍二千里土地無霜雪草木不死四面是山谿人皆髡髮穿耳女人不穿耳土地饒沃既生五穀又多魚肉有犬尾短知齧尾状此夷舅姑子婦臥息共一大牀略不相避地有銅鉄唯用鹿格為矛以戦鬪摩礪青石以作弓矢取生魚肉雜貯大瓦器中以塩鹵之歴月餘日仍啖食之為上肴也

とある。気候，地形，民俗，鉱産皆略隋書流求国伝に相合している。然し青石を礪して弓矢を作るとする興味深い記載が見えている。弓矢を作るとは石鏃を作るの意であろう。青石を用いた磨製石鏃は台湾先史時代に屢々見られる石英片岩糸の石器であることから見て注目すべき記載である。

太平御覧所引の臨海水土志夷洲記事には後漢書註引の夷洲の条に比して200字位増加している[13]。その夷洲諸土俗には興味深いものがある。細布を作り，斑文布を作ること，大杵を用いて舂くや四五里鼓のように聞えること，粟酒を作ること，抜歯の風のあること等は台湾，琉球のいずれにも通じる習俗といえるが，人頭を得れば，脳を斫去してその面肉を駁して骨を留める習俗は台湾の Indonesia 原住民族の間に見出されることからして，台湾における習俗を語っていると見てよいであろう。

然しながら中国古文献に東海の夷洲についてのやや広い，然してより詳細な記載が登場するのは，三国の呉の時代から両晋南北朝時代を経て3世紀半の時間の経過をまたなくてはならなかった。即ち隋書流求国の出現を待たねばならなかった。然しながら中国東南沿岸地方と東海の諸島，即ち台湾，琉球を含む黒潮水域

の諸島との関係は三国志の時代より，遙かにさかのぼる時代から存在したと思われる証跡が考古学的に次第に確められつつある。

台湾先史時代における彩陶，繩席文土器，黒陶，印文土器および豊富な華南系石器の登場は台湾と浙江，福建などの沿海地方との交渉が台湾の先史貝塚時代から存在したことを語っている。

なお台湾先史時代の中に石英片岩系の美しい石材を用いた石器中に，古代中国の饕餮文の変様からくると見られる彫刻をもったものが見られる（円山貝塚出土品）。その他蟬形と見られるペンダントも見られる（円山貝塚出土品）。

なお伝世品ではあるが，紅頭嶼の Yami 族の中には comma 形の突起をそなえた耳かざりを伝えているものがある。古代中国文様に関係をもつと思われる円山標品が台湾先史時代の如何なる時期に登場するか，如何なる文化と複合して登場するかはまだ明らかにされていない。同様の古代中国文様に関連をもつと見られるものが，琉球にも，わが南島の北端にも登場している[14]。

古代中国の竜形の文様に発すると見られる彫刻をもつペンダントや饕餮文からくると見られる彫刻を有するペンダント（いずれも骨製品）がわが繩文後晩期に相当すると見られる琉球先史時代前期の時代に登場している。竜形からきたと見られる最も興味深い標品が兼城貝塚から出土している。それは Dr. KALGREN のいわゆる winged dragon の一種かと見られる。その翼の部分が離脱することによって生まれると見られる器形は種子島の広田の埋葬遺跡に登場する（弥生式中—後期）。

なお琉球先史時代には Dr. KALGREN のいわゆる trunked dragon を想わせるものや，一角獣兕の如き獣形を想わせるものが熱田原貝塚から出土している（いずれも貝製品）。

尚，winged dragon 系の器形のくずれたものが地荒原貝塚から出土している。又これら竜形文に関連があると見られる文様は南島の入墨文の中に登場している（大島および徳之島において採図された手首内面に施されたものにそれが見出されている）。

なお興味深い資料について附記したい。台湾先史時代の西部海岸南部の黒陶に伴う華南即ち呉越系と見られる有茎の石鏃に相似の器形を示す鏃が沖縄本島の中部勝連半島に近接したヤブチ島の洞窟の遺跡から1961年の夏発見された。器形には明瞭な有茎以外に柳葉状の器形，長目の三角形を示すもの等変移に富んでいる。それらの中には金属器の影響を示すものではないかと見られる形跡を示すものもある。然しヤブチ島の鏃は台湾西海岸の黒陶遺跡と関渉をもつものと考える必要はない。むしろ筆者は江南との間になんらかの関渉が存在した証跡を語るものであろうと見ている。

なお一部断折しているので全形は不明であるが，潤数寸なる鞏状の石器が共伴していた。

残念なことに共伴する土器の編年的位置が未定なので琉球先史時代のどの時期に属するかはまだ明らかでない。然し甚しく降るとは思われない。ヤブチ島洞窟遺跡の調査は沖縄コザ中央高校の嵩元政秀氏と筆者によってなされたものである。

なお琉球の南境の八重山と台湾とが先史時代において——少くともそのある時期において——共通の文化領域を示していた時代があることを指摘しておきたい。

Walzenbeil は台湾にも見出されるが，琉球一般に広く盛行している。然し Walzenbeil と beaked adze との共存する姿において見出されるのは台湾と琉球の南圏八重山諸島であろう。

Philippine の Luzon の芋掘器（鉄製耨器）にはかすかに中央に稜があり，beaked adze の名残をとどめているものが見出されることから見ても，beaked adze が耨器であることは疑いえない。台湾先史時代の beaked adze の中には，美しく磨研された有稜の石器が移川子之蔵教授のいわゆるパツ型石器の中に見出されるが，同様のものは華南にも見出される。然してかかる精製品とともに粗製打造の beaked adze は台湾先史時代において出現しており，Walzenbeil と共存する遺跡もある。八重山の beaked adze 多くは粗製のadze で明らかに陸耕と関係して存在したと見られる。陸耕として考えられるのは yam 系の芋作と粟作である。wet talo の栽培が掘起し棒の使用と結びついて見出されるのは台湾の紅頭嶼であるが，琉球に

おいても，かっては広く見られたものではなかろうか。現在でも一部に掘起し棒は農具として残存している。琉球八重山の先史石器はその製作の手法から見る時，Baxonian type のものが圧倒的に優勢に見出される。何故か琉球本島，奄美大島，徳之島を含む北部圏には Baxonian type の手法を示す beaked adzeを筆者は未だ見ていない。掘起棒が優勢に用いられたためであろうか。

八重山の農耕文化に粟作のあったことはその独特の土器の出現によっても考えてよいであろう。

円味をもった然しすわりのよい底をもつ有唇鼓胴の土器は穀食との関係において登場したものではなかろうかと見ている。それらの土器には口縁に近く耳状の把手を水平に附することが多い。華南に現在行なわれている穀食用の土鍋と同様の機能をもっていたものと考える。耳（lug）を有するが故に lug pottery とよぶことにする。芋を主食とする間は Polynesia 的な石を焼いてその間に木の葉に食物を包んで挿入して煮焼きする方法でよかったが，穀粒の粒食が行なわれるためには，土器，然もふき上げてきたら容易に火からはずしうるような把手（耳）をもつ用器を必要としたであろう。

lug pottery が台湾東海岸一殊にその南部地域の出土品中に見出されることは，その地方が粟作と talo 芋栽培との平行する Yami 族や Pyuma 族の地方に当ることと思いあわせて見て興味深いのである。

かくて台湾と琉球の八重山圏とは，かってその先史時代において，生産の道具において，また栽培とそれをめぐる生活において，共通の領域をなしていた時期のあったことが明らかになったと思う。八重山の南端の島，波照間島に台湾北部に盛行する印文土器の出現していることは金関丈夫博士の「八重山の古代文化」[15]においても明らかにされている。

台湾と琉球の南部圏の八重山とが同一文化領域にあった時代がその先史時代にたしかにあった。波照間のよび方が Indonesia 的な地名として考えられる必然性の極めて強いこともなんら不思議ではなかったのである。

以上によって明らかであるように江南と台湾および琉球等の交渉はかなりさか上って早い時代からあったと見られるのに，隋以前の中国古文献には何んらの具体的な記載が見出されないのは，具体的な知識が切実には必要とされていなかったからでもあろうか。然して隋書流求国伝に至っては著しく，台湾および琉球に関すると見られる記載が増加する。然してその記載においても両者の区別は明瞭でなく，混然たる形式をとっている。そこから隋書の流求国を台湾に限定して見ようとする説と琉球に限定して見ようとする説との対立が生まれるのであるが，不思議に両者をともに含むとする見方は Le marguis d'Hervey de SAINT-DENGS[16]から Dr. Ludwig RIESS[17]に至る初期の西欧学者，伊能嘉矩氏[18]を除いてつづくものがないのである。

三

以下いささか隋書流求国伝の内容にふれ，その意義について考察を加えて見たい。隋書流求国伝には「厥田良沃先以火焼而引水灌持一挿以石為刃長尺餘濶数寸而墾之」なる注目すべき記載が見られる。長尺餘濶数寸の石器は現在の琉球諸島の先史遺跡においては極めて少数の注目をひくものはあるが，殆んど発見例をあげることは困難である。然し先史時代台湾においては容易に，豊富に発見される。然しながら地理学的立場或いは民族学的立場に立って隋書流求国伝の内容を検討する時，これを琉球(沖縄)なりとする側にも，これを台湾なりとする側にも，それぞれ矛盾する資料があらわれてくる。いずれに立つ者も自からの立場に役立つ資料の上に立って相手の矛盾をつくことが出来る。そこで思うに，隋書流求国伝の流求を今の琉球或は台湾のいずれかの側に限定してあてはめることに無理があるのではなかろうか。

隋書の編纂者は当時において，台湾――琉球の一連の列島についての漠然とした知識をもっていて，両者を別個の地区として意識していなかったのではなかろうか。当時にあっても又その後かなり久しい間，一連につらなる琉球列島から台湾にかけての諸島嶼をいくつかの別個の地域として考えねばならぬ理由も必要もなかったと思われる。従って現在は区別されているこれらの地域を漠然と流求国伝の中にもりこんだものと

いえないであろうか。従ってある部分は琉球(沖縄)にあてはまる記載であり，又ある部分は台湾に当てはまる記載であったとすることが出来ないであろうか。水行五日而至という如き地理的記載も集約的な漠然とした知識だといえないであろうか。

然しながら編者も北境と南境の地理的風俗的相違については意識していた。即ち「南境風俗少異」として，南境の記載を試みている。人有死者邑里共食之有熊羆狩狼尤多猪雞無牛羊驢馬とあり，そのあとに続いて前掲の長尺餘濶数寸の石器の使用の記載が登場する。人有死者邑里共食之という習俗はかっては琉球に広くあったのではないかと思われる点がある。伊波普猷氏は「昔は死人があると親類縁者が集まって，其の肉を食った。後世になって，この風習を改めて，人肉の代りに豚肉を食ふやうになったが，今日でも近い親類のことを真肉親類といひ，遠い親類のことを脂肪親類といふのは，かういふところから来た云々」という民間伝承のあることを伝えている[19]。死者の肉を食う習俗は未開社会に見出すことが出来るから隋書時代の台湾にこの習俗がなかったといい切ることは出来ないが近世の台湾には完全に見られない。然し伝説的には食人の風の存在を物語る資料があると甲野勇氏はいわれている。

流求国人の，「人深目長鼻類胡」といわれる体質は琉球の人の風貌を想わせるものがあるが，甲野氏の指摘されるように台湾の Atayal 族の如きは彫りの深い風貌をもっている[20]。然し「男子拔去髭鬚身上有毛之處皆除去」する習俗は甲野氏の指摘されるように，多毛の体質をもつ民族の間には見られないが，台湾の Indonesia 系原住民族の間には除毛の風が行なわれている[21]。

入墨は台湾琉球いずれの側にも見出されるが，「婦人以墨黥手為蟲蛇之文」とあるのは琉球の婦人に現在まで見られる風に当るように思われる。琉球婦人の手甲に行う入墨の中には蟲蛇之文と見られる文様をとどめている例がある。

俗事山海の神祭は琉球のそれを思わせるが「壁下多聚髑髏以為佳人間門戸上必安獸骨角」の習俗は琉球には見られないが，台湾原住民の間には顕著な習俗であった。流求即ち琉球説の有力な論拠とされる「明年復令寛慰撫之流求不従寛取其布甲而還時倭国使来朝見之曰此夷邪之国人所用也」とある布甲は流求北圏の掖之国人のものと見てもよいが，南圏の台湾原住民族の間になかったとはいえない。甲野氏は流求国伝の武装として登場する「編紵為甲」を布甲であるとして指摘されている。甲野氏はタイヤル族着用の布製陣羽織風の衣服に類するものに思われるとされている[22]。同感せざるを得ない。「或用熊豹皮」に至っては台湾原住民族以外の着用とするわけにゆかない。かくて布甲の問題も，流求即ち流求と限定するきめ手にはならなかった。

隋書の土語については伊能嘉矩氏殊に白鳥庫吉博士によって解釈されている。それがマレイ系の土語として解釈されることは流求即ち台湾なりとする説の最も有力なささえとなっているわけであるが，今の琉球の地名には語頭に l をつけ，或は語尾に an を附して場所を示す Indonesia 的場所の表示のし方が見出されるもののあることを金関丈夫博士は指摘されている。博士は波照間の如きも Indonesia 的な地名として明快な解説を与えられている[23]。今の琉球においても過去において Indonesia 系の言語が行なわれたことがなかったと言い切ることは困難であろう。

奈良朝朝廷の南島経営と関連して日本文化の旺然たる登場となることは須恵器の広範な流入南下の状況がそれを語っている。かくて日本的文化の様相の濃厚な文化地帯となることにより琉球は台湾と次第に懸絶する地区となると見ている。然し須恵器流入以前の時代にあっては，琉球殊にその南域をなす八重山地方は台湾に近似する生産と文化の様相を示していたように思われる。

さて以上の考察では十分といえないが，大体において隋書流求国伝の記載には台湾，琉球の諸事情が混然ともりこまれていると見られる状況を明らかになし得たと考える。また混然ともりこまれたとしても，両地区を区別する必要がなかったとすれば，不当のことではなかったともいえよう。

中国の学者では近年梁嘉彬氏は強く隋書流求を今の琉球なりとする説をとっておられるが[24]，筆者が梁氏と見解を異にすることは既に述べてきたところから明らかであると思う。然し梁氏の見解の中，琉球国の古名，夷耶久，邪久，琉玖，益救，幽求 (Yie-ch'iu, Ye-c'hiu, Ya-ch'ieu, Yiu-ch'iu) 等のよび方が

皆，瀛洲(Yanchiu)，夷洲(Yi-chiu)等の音の転変して来るものとする見解を興味深く思うものである[25]。

もっとも夷那久と流求とは同一で音訛によって字形を異にするものであることは日本の学者では新井白石，伊地知季安，加藤三男等の先人の説くところであり，吉田東伍博士も亦，邪久と流求とは同一音であるとされている。

伊能嘉矩氏は大日本地名辞典の「琉球」の項に，「原と漢族の与へし古き称呼にして，本島の位置が，今の琉球列島と一帯断続して相連接するを以て，当初之を認めて，一群の島彙とし，概して琉球と称したるものの如し」といわれ，「既にして地理的情形の漸く闡明せらるるに従ひ，自ら之を区別するの傾向を生じ，明代の頃には今の琉球列島を大琉球と呼び台湾を小琉球と呼ぶに至れり」とされている。

東恩納寛惇教授は「日本からは今の屋久以南の諸島を漠然と邪久と唱え，中国からは台湾以北の諸島を漠然と唱えたもので，R音とY音と通ずることは硫黄と書いてユオウと唱えることによって知られる」といわれている[23]。然し隋書の流求については幣原坦博士の台湾南部の瑯嶠族を沖縄から移住した民族であるとする説をあげられ，博士が隋使の上陸地点は台湾南部であることを暗示されたと紹介されたのみである。

筆者は既述の理由によって，中国東海を東方において囲む島嶼群を夷洲或は流求と漠然とよばれたものが，次第にその想定的な島嶼群の知識が充実するにつれて，その地理志の内容が具体的記載を加えてゆくと考えるもので，伊能嘉矩氏の見方に一致した見方をとるものである。

然して，多くの先人と相違する点は隋書においては未だ漠然，混然と台湾琉求の記載がとりこまれているとするもので，未だ両者の区別が問題となっていなかったとするものである。

一連の流求の南端において，流求（琉球）の名称が南方では小琉球嶼に落ちついて残っており，列島の東北端において屋久島に名残をとどめているのも流求圏の範囲を今に語るものとして興味深く思うものである。

遣唐使の時代ともなれば流求諸島の所在は十分に知識されたからこそ，南路コースが成立ったと考える。然しながら台湾と流球の区別が中国側から具体的に区別的に扱われる必要は江南と両者の間の貿易の本格化の時代をまって生じたと見るべきであろう。沖縄本島の城嶽貝塚から明刀銭が出土していることについてはその出土状況が不明であることから見て，しばらくおくとして，徳之島の貝塚から土師器の変形とも考えられるような土器と共に開元通宝が出土し，然かも石器は全く伴出しないことが甲野氏によって指摘されている。[27] 開元通宝は沖縄本島北谷村野国貝塚から発見されている。同貝塚は多和田真惇氏によると川田原系即ち沖縄本島の先史時代晩期の貝塚であるという。とするなら甲野氏があげられた開元通宝を出したとされる徳之島の貝塚の状況に近似しているように思われる。

然しながら沖縄野国貝塚の場合は出土状況が不明であるので，開元通宝をもって考えられる時代の登場と見るべきか，より後代における登場と見るべきかを判断することが出来ないのは遺憾である。野国貝塚発見の開元通宝については金関丈夫教授がその意義について詳説しておられる[28]。

台湾では筆者が1948年8月台湾を去ってから以後のことであるが，台湾大学の地質学教室の林朝棨教授によって澎湖島において多数の貝塚が発見され，且つ宋代青磁の含まれることが明らかにされたと台湾大学の考古人類学教室の宋文薫講師の私信によって知った。琉球に宋代青磁が遺物として登場しているかどうか知らないが，G. H. KEER 博士のコレクションを Honolulu の Academia of Arts で見せていただいた時には城址の採集品中に元代青磁が見られた。然し最も顕著なのは明代の青磁と陶器である。台湾においても近代の平埔族系の遺跡と考えられるものには明代陶片と見られるものが豊富に登場してくる。かくて明瞭に頻繁な交易が始まるのは明代とすることが出来る。陳侃の「使琉球録」においては台湾を小琉球，琉球を大琉球として区別しているのもゆえなしとはしえないと思う。それにもかかわらず，陳侃の「使琉球録」においてさえかっての夷洲または流求は「琉球」であって，その中において大琉球と小琉球にわけられているに過ぎないのである。然しながら明代においてはわが琉球は少くとも別個に大琉球として扱われるだけの変容を示していた。政治的統一があり，文化国家をなしていたのである。

隋書の流求国伝の記載はそのまま唐書，新唐書に伝載された。また宋の宝慶元年（1225）趙汝適撰の諸蕃志

にも大体において従来の隋書の記載が踏襲されているが，記述は甚だ粗略である。

例えば石器使用の条についても，厥土沃壌先用火燒然後引水灌注僅数寸而墾之とあって，石器についての具体的な説明がなくなって「僅数寸」の意味が不明になっている。然して更にその後に新しい知識が附加されている。

無他奇貨尤好剽掠故商賈不通土人間以所産黄蠟土金麑豹豹往焦於三嶼旁有毗舍耶談馬顔等國

として以下に毗舍耶の記載がある。その中には宋の淳熙年間竹筏によって蕃民が泉州の海村を掠奪し鉄器類を奪う状況についての記載がある。宋末に編纂された文献通考には，琉球国在泉州之東有島曰澎湖烟火相望とあり，元の至正五年（1345）に成った宋史にも略同様の記載があるから，それらにおいては，琉球は台湾を明らかにさしているといえよう。諸蕃志における毗舍耶については伊能嘉矩氏は Philippine 群島における Bisaya をさすものと考えているが，台湾蕃民の遠征奪掠の事情と見られることが毗舍耶の条において取り上げられていることから見て，台湾西海岸南部のある地方が毗舍耶なる名称において意識されていたであろうと考える。藤田豊八博士の意見もこれに近い[29]。大明一統志（天順五年(1461)）に至ってはその琉球本伝において諸蕃志の毗舍耶の記載をそのまま踏襲して蕃民の遠征暴行のことを載せている。即ちそこでは台湾蕃民の記事としてとりあげられているのである。これによって台湾先住民の鉄器利用が既に宋代において見られたこと，然してそれは極めて乏しいものであったことが推定されると思うのである。

直接台湾に関係する記事ではないが，諸蕃志の中にあらわれた南海諸国との貿易品の品目の中には注目すべきものがある。

渤泥国の条には，商人以白甕器酒米粗塩白絹貨金昇之とあり，また麻逸国の条には商人用甕器貨金鉄鼎烏鉛五色琉璃珠鉄針等博易とある。白甕器琉璃珠即ちトンボ玉が南海諸国にはいった年代をこれによってほぼ推定出来るとともに台湾先史時代遺跡において発見される白甕器，トンボ玉類の移入の時代的上限をほぼ想像させるものがある。

オランダ時代になると CANDIDIUS の台湾島要略 (Discours ende cort verhael van't enlant Formosa) の中にも鉄槍の使用の記載が見られる。Happart の Farolang Dialect の中には次の語を見出すことが出来る。

Ach, roest ; Ach o Diepa, Ijzer roest（鉄さび）

Ach o Barieg, Koper roest（銅さび）

鉄銅が Favolan 蕃に存在していたことがわかるのである。

以上諸蕃志の記載を通して，台湾先史時代の物質文化の一面をうかがったわけであるが，諸蕃志の琉球国の章の末尾に「旁有毗舍耶談馬顔國学國」とある談馬顔国の比定をめぐって，台湾先史文化の考察の上に極めて重要な示唆に富む研究が金関丈夫博士によって提示されている（日本人類学会日本民族学協会連合大会第七回における発表，「諸蕃志の談馬顔国」）。

談馬顔国の比定については，古く伊能嘉矩氏の紅頭嶼説（1907）があり，島夷志略の校註者藤田豊八氏（1911）諸蕃志の英訳者 HIRTH, ROCKHILL（1912）の両氏ともに伊能説に同じている。

然るに金関丈夫博士は談馬顔の音に近似する音を示す地名の分布が Batan 諸島から，紅頭嶼，小琉球嶼を含む台湾南部地方に最も濃厚であり，東海岸線に沿うて，北は基隆地方に及び縦走山脈に沿って北は基隆地方に及び，縦走山脈の西部では南北を通じて山脚地帯にわたっている事実に注目された。なおこの分布圏に共通の先史文化の存在することを指摘された。さてその先史文化に共通の特徴の主要なるものは箱式石棺埋葬法である（例えば，墾丁寮，小琉球嶼，太麻里，台東附近の呂家社および美和，卑南およびその附近，都鑾，新城，基隆，太馬鱗，竹山，また江頭嶼にもその痕跡があり，烏山頭の伸屈葬もこれに算しえられる）。東海岸地方にはこれと関連して，南北にわたって屢々巨石建造物を遺している。共通の第二の特徴は貝製の腕環或はこれに由来すると考えられる石製もしくは銅製の扁平幅広の腕環である。また屢々緑色石材への嗜

好を示す。人骨を伴う場合には少年期における健康永久歯の人工的抜去の風習を有したことを示している。土器文化には特色がない。博士は以上の特徴を指摘された上で，その文化の特質は漁猟を伴う耨耕文化であり，西海岸地帯のいわゆる「流求国」の長尺幅広の石犁による水田耕作少くとも深耕文化とは異質のものであったと要約されている。談馬顔国の考定を通して台湾先史時代における二系の文化とその領域に言及された稀有の論考といえよう。

比較的新しい時代になると黄叔敬の台海使槎録におさめられた蕃俗六考の中に北路諸蕃の器用の中に円底縮口微有唇の土器を製作していたことが記載されている。土器に関する記載の最初のものである。蕃族六考に，新港蕭壠麻豆各蕃昔住小琉球後遷址とあるのは台湾西辺の種族の移動に関する最初の記載例であるように思う。

鳳山県採訪冊には，「小琉球嶼天台澳石洞相伝旧時烏鬼蕃族而居後泉州人乗夜放火尽燔斃之」と見えている。伊能嘉矩氏は以上の記載を大日本地名辞典台湾之部134～135頁において引用して，更に「東港の人洪古春の実査によれば，該遺跡より古土器および白螺銭を得たりといふ」と附記している。伊能氏はこの遺跡を和蘭時代南台湾にはいった黒人系奴隷の余喘を山陬海島に退保せるを告ぐるのではなかろうかと考えられたが，遺跡の状況を実査するとその推測の誤れることが明らかである。

蕃族慣習調査報告書第5巻の1，191頁には「古代ノ小琉球嶼人ニ関スル伝説」なる記載がある。

> 小琉球嶼ハ東港ノ西方ニ横ハンル島嶼ニシテ平地ニ近クノ本族（パイワン族）ノ部落ヨリ遙ニ之ヲ望ムコトヲ得ヘシ。本族ハ之ヲキポアト云フ。リキリキ社以南ノ蕃人ハ曰ク此キポアニモ昔ハ我等ト同様ノ蕃人住メリ。彼等ハ時々舟ニテ西方ノ海岸ニ来リ我等ト物品交換ヲ行ヒタリト。尚枋山，枋寮ノ中間ニ在ル平埔庄ハ右キポアノ民カ来リ開キタル部落ナリト云フ。又内文，スボン，リキリキノ三社ニハキポアノ民カ来テ其社民ト為リタル伝説アリ。即内文社ニ於テハ昔該社民ロジア・キジヤントト云フ者平地ニ降リタルニ見慣レヌ風ヲ為シタル人ニ出会シ之ヲ訪何シタルニ「我ハキポアノ人ナリ」ト云ヘリ。乃チ之ヲ伴ヒ帰リパソソ家ノ嗣ト為セリ。又リキリキ社ニ於テハ昔キポアヨリ一人当社ニ来住セリ。其ノ状貌我パイワヌト異ラス。其ノ子孫ハ今日ゾヌカゾヌ家トシテ現存セリト云ヘリ。又此ノ小琉球嶼民ハ西方海岸ニ上陸シテ一ノ部落ヲ立テタリ是今日ノ平埔庄ナリ。

筆者は1948年5月20日金関丈夫博士とともに小琉球嶼を実査した。その結果小琉球嶼の先史遺跡が恒春半島の墾丁をはじめとする西海岸南部地方の赤褐色無文の壺型土器を主体とする先史遺跡と文化様相において酷似していることを見た。その事実と上述の「古代小琉球嶼人ニ関スル伝説」「番族六考」中の伝説と思い合せて見る時，台湾西海岸地方の先住者の系統を考える上に重要な手がかりを見出し得るように思われる。

四

この小論は文献の参照において不備の所が多い。殊に隋書流求の論争にふれた場合，参照が非常に不十分であったことを知っている。然し論争の批判を目的としたものでなかったために敢て完全な参照引用を行なった。なお殆んど参照を逸した和蘭時代，清朝時代の諸記録，漂流記等を通しても考察すべきものはあると思われるが，本稿は主として中国古文献にあらわれた台湾先史時代を考えることを目的としたので，近世以降のものについては後考を期したい。

文　　献

1）市村瓚次郎，唐以前の福建及台湾．東洋学報，8/1.
2）白鳥　庫吉，隋書流求国の言語に就いて．民族学研究，1/4.
3）桑田　六郎，上代の台湾民族学研究．18/1-2.
4）原田　淑人，徐福の東海に仙薬を求めた話．*Museum*，84号，1958.
5）市村瓚次郎，前掲論文.
6）石田幹之助，南海に関する支那資料，第二講.
7）市村瓚次郎，前掲論文.

8）伊能　嘉矩，台湾文化誌上巻，4—12頁.
9）金関　丈夫，呉志の亶洲と種子島（毎日新聞学芸 34.7.29）.
10）原田　淑人，前掲論文.
11）金関　丈夫，前掲論文.
12）白鳥　庫吉，前掲論文.
13）梁嘉　　彬，「論隋書流求為台湾説」的虚構的過程及其影響—兼東呉夷洲為流求.
14）国分　直一，南島の獣形垂飾り（世界美術全集(角川版)第一巻先史日本所収月報）.
　　南島の動物文彫刻に就いて．日本考古学協会総会（東北大学昭和 36.10）.
15）金関　丈夫，八重山群島の古代文化．民族研究，19/2.
16）d' Heryey de SAINT-DENYS, Ethnographie des Peuples êtrangers à La Chine (1826).
17）RIESS, L., Geschichte der Insel Formosa (1897).
18）伊能　嘉矩，大日本地名辞典．琉球の解説及び台湾文化志，上巻.
19）伊波　普猷，をなり神の島．所収「南島古代の葬制」.
20）甲野　　勇，隋書流求国伝の古民族学的研究．民族学研究，3/4.
21）甲野　　勇，同　　上.
22）甲野　　勇，同　　上.
23）金関　丈夫，前掲論文．民族学研究，16/2.
24）梁嘉　　彬，前掲論文.
25）梁嘉　　彬，同　　上.
26）東恩納寛惇，琉球の歴史.
27）甲野　　勇，前掲論文.
28）金関　丈夫，琉球野国貝塚発見の開元通宝について．九州考古学，9.
29）藤田　豊八，島夷志略校註.